

岡山大学 MONTHLY DIGEST

VOL. 26
2018. 6

TOPICS

1

岡山大学が「将来世代応援企業賞」を受賞!!



和仁敏行岡山県民生活部次長(右)から表彰状を受け取る高橋香代理事・副学長(企画・評価・総務担当)

本学は平成30年度「将来世代応援企業賞」を受賞し、6月7日、表彰状が授与されました。

同賞は日本創生のための将来世代応援知事同盟が、子育て支援、女性や若者への支援、働き方改革について、独自性、先進性のある取り組みを積極的に行っている企業や事業所を表彰するものです。本年度、高等教育機関で受賞したのは本学のみです。

受賞理由となった取り組みとして、平成21年に設置した性別・国籍・年齢・障害等に関する構成員の多様性を高め、ダイバーシティ文化の醸成に努めることを目的とする「ダイバーシティ推進本部」や、全国に先駆けて導入した「ウーマン・テニユア・トラック(WTT)」制による女性教員の雇用拡大などが挙げられています。他にも、男女ともに働きやすい職場環境の構築を目指し、保育施設の充実、研究支援員制度、復職支援助成制度などによる教職員などのサポート体制の充実も図っています。これらの取り組みは多くの実績を上げており、他大学のモデルとなるものとして高い評価を受けました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id7610.html



TOPICS

2

岡山大学病院で 国内初のCTガイド下針穿刺ロボットを用いた臨床試験を実施

岡山大学病院は6月6日、本学で開発したCTガイド下針穿刺ロボットを用いた人に対する初めての臨床試験(First-in-human試験)を実施し、成功したと発表しました。

患者は60歳代の女性で、左腎に認められた腫瘍に対して病理検査を行う必要があり、事前にロボットを用いた針生検を行う臨床試験について了承を得たうえで検査を実施しました。

ロボット手術は、ダ・ヴィンチという手術用ロボットが既に国内で導入されていますが、針穿刺を行うロボットは国内では例がなく、今後の活用が期待されています。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id7643.html



最近の大学の取り組み

「第3回国連STIフォーラム」で本学の取り組みを世界に展開!



国連が全世界と進める「持続可能な開発目標」(SDGs)と科学技術との関係を討議する「第3回STIフォーラム」が6月5~6日に国連本部(アメリカ・ニューヨーク)で開催され、本学の横井篤文副理事・上級UGAが参加しました。

横井副理事は本フォーラムで、ステークホルダー枠として参加。同枠での参加は日本の大学としては初めてのことであり、今回の参加も唯一となりました。フォーラムで話し合われる科学技術イノベーションをSDGs達成に活かしていく方法や、その方策を可視化する工程表(STIロードマップ)の策定意義などについて白熱した討議が行われ、横井副理事も世界各国から集まった約1000人の関係者らと意見交換を積極的に行いました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id7619.html



3年連続の快挙！馬教授、山地准教授に「Highly Cited Researchers」認定証



Clarivate Analytics社(旧トムソン・ロイターIP&Science)が発表した高被引用論文著者(Highly Cited Researchers)2017年度版に、本学資源植物科学研究所(IPSR)植物ストレス学グループの馬建鋒教授、山地直樹准教授が選出され5月25日、同研究所で認定証の授与式が行われました。科学研究の各分野において世界で高い影響力を持つ科学者を、論文の引用動向から分析して選出したもので、馬教授と山地准教授の選出は2015年から3年連続となります。

授与式には、クラリベイト・アナリティクス・ジャパンの渡辺麻子学術情報事業部長、池博司カスタマーコンサルタントが出席。今回の選定対象となった論文の中には、被引用数で植物・動物学分野の論文において、1万本当たり上位4本に入る非常にインパクトの高い論文もあることを紹介し、馬教授と山地准教授の研究のレベルの高さを示しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id7589.html



将棋部の羽仁さんが雪辱を果たし将棋の学生名人に！

本学将棋部の羽仁豊さん(法学部4年生)が、5月26、27日に東京都内で開かれた将棋の「第74回学生名人戦」(全日本学生将棋連盟主催)で初優勝しました。羽仁さんは昨年の同大会で準優勝しており、学生最後の年に雪辱を果たしました。

羽仁さんは、昨年決勝で敗れた東京大学の藤岡隼太さんを準々決勝で破り、決勝では立命館大学の木村孝太郎さんとの接戦を制して、悲願の優勝を果たしました。7月に開催予定の「第12回朝日杯将棋オープン戦」に学生アマ代表として出場し、プロ棋士と対戦することになります。また、12月に行われる大学生による個人戦の全国大会「第47回学生王将戦」にも招待されます。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id7600.html



サンゴの骨格成長に寄与する共生藻の役割を解明 ～広大なサンゴ礁が形成されるメカニズムの解明へ～

本学大学院自然科学研究科の井上麻夕里准教授らの共同研究グループは、幼生が定着、変態した直後の稚サンゴを用いて、共生藻を持つサンゴと持たないサンゴを作成し、海水温などを変化させた水槽で飼育することに成功しました。本研究成果は6月6日、アメリカ地球化学会の学術誌「Geochimica et Cosmochimica Acta」に掲載されました。

共生サンゴは非共生サンゴに比べ、炭酸カルシウムからなる骨格の成長量が大きいことが分かっていますが、今回井上准教授らのグループは、実験期間中に成長したサンゴ骨格の化学分析を行うことで、この違いがサンゴ体内のpH上昇に起因していることを発見しました。共生藻がサンゴ礁の成長に重要であることは昔から報告されていましたが、具体的な役割についてはよく分かっていませんでした。今回の成果はこの謎の解明に大きく寄与し、サンゴが共生藻のほとんどを失ってしまう「サンゴの白化」が、いかにサンゴ礁の成長を阻害するものであるかが示されました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id546.html



尿1滴で分かる尿中糖鎖の違いで糖尿病腎症の悪化を予測できる！ ～尿中糖鎖は新たな腎症進展メカニズムを反映～

本学大学院医歯薬学総合研究科(医)腎・免疫・内分泌代謝内科学分野の和田淳教授、三瀬広記医員らの研究グループは、尿中の糖鎖排せつ量の違いが糖尿病患者における将来の腎臓病悪化を予測できる新たなバイオマーカーであることを世界で初めて突き止めました。本研究成果は6月21日、アメリカの科学雑誌『Diabetes Care』の電子版に掲載されました。

糖鎖は生体においてさまざまな役割を担っている重要な生体高分子ですが、構造が複雑であるためその測定が困難で、腎臓病や糖尿病における糖鎖の研究は進んでいませんでした。今回、共同研究者であるグライコテクニカ社の開発したレクチンアレイを用いることで、尿1滴(20マイクロリットル)を用いるだけで、多くの患者の尿中の複数の糖鎖量を短期間かつ同時に測定できるようになりました。そして、多施設における糖尿病患者の尿中糖鎖量を測定し、将来腎臓の機能が悪くなる人では、特定の尿中糖鎖量が大きく異なっていることを発見しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id547.html

